



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京大学医学部卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

この人の訃報がテレビに一齐に流れた朝。あるワイドショーには「憎まれて死にたい」とテロップが躍っていました。しかし、別の番組では「愛されて死にたい」と書いてある。思わずどっちやねん？ と心の中で呟きましたが、この一筋縄でいかない人間臭さというか、善人にも悪人にも見えた多面性が魅力でもあったのでしょう。東京都知事の後任であった猪瀬直樹氏が「異人、変人、夷人、なによりも偉人です」と追悼されていたのも、言い得て妙でした。

しかし、過去には聞き捨てならない問題発言も多々ありました。2020年に京都で起きた医師嘱託殺人事件の際、罪を犯した医師を擁護し、「ALSのことを「業病」と発言したことは、日々ALSの方々の在宅医療に関わっている僕としては、到底許せるものではありません。一度お会いして討

242 作家・元東京都知事 石原慎太郎



作家の石原慎太郎さんが2月1日に、都内の自宅で逝去。享年89。死因は明かされていませんが、石原さんは3年前に膵臓がんが発覚、一度は寛解したものの、昨年10月に再発、腹膜にがんが転

移していたそうです。しかし亡くなる1週間前まで執筆活動を続け、最期は眠るように旅立ったといわれています。

この報道を見た僕の患者さんから、「膵臓がんでも石原さんのように穏やかに自宅で逝けるのですか？」と質問をされました。もちろんです。膵臓がんもとても怖いがん。苦しい最期、というイメージがあるようですが、そんなことはありません。

確かに膵臓がんは、他のがんに比べて発見しづらく、判明時には既に治療が不可能な状態ということが多いです。

次男の良純氏が、「亡くなる2週間はずいぶん辛かったと思う。(中略)自分が前へ前へ進んでいくことだけに執着して生き抜いてきた人だから、肉体が滅びた時に自分の精神もなくなってしまうたら、その先はないと。だから、最期の2週間は恐怖心みたいなのが芽生えて」と語っていたのが印象的でした。

どんなに強い人でも、死に向かう時は魂の痛み(スピリチュアル・ペイン)があります。ただただ黙って、寄り添うこと。それが、最後の親孝行なのです。

善にも悪にも見える人間臭さ

「天寿がん」の大往生

ともまありますが、最近では早期発見で完治したり、治療を続けている人も多くいます。

そして、日本人男性の平均寿命は81・64歳。石原さんに早期の膵臓がんが見つかったのが85歳を超えてからですから、がんで亡くなったというよりも、がんがあったけれども、寿命を全うされた、いわゆる「天寿がん」の大往生とお見受けしました。